



蛇笏俳句に見る「老い」

福田甲子雄

何かこのテーマを与えられたとき忘れていた自分自身の年齢を思い出し、老いということを考えなくてはいけない歳になっているのに気がついた。これまでまったく老いについて触れることはなく、自らその自縛を避けて通ってきたことを知らされたような気がした。

晩年、老境という言葉を身近にして耳を傾けるようになったが、それは各個人の生涯を振り返るときに定まるもので、誰も同じとは限らない。勤めが定年になったから明日から晩年になる、というのも可笑しな考え方で定義にはならないだろう。晩年は一生の終りに近い期間を指しての言葉であろうし、年老いたときということにもなるだろう。それでは晩年、老境は何歳から該当することになるだろうか。新聞紙上などで、六十五歳の老人が交通事故、といった記事を目にするが、何か現代社会の高齢化の中ではそぐわない感じを受けるのは私だけではないまい。しかし、よく考えてみると一方に年金受給年齢という事実があるので、新聞社全面での老人の年齢を

肯定せざるを得ないのではあるまいか、とも思う。俳人の場合、晩年にしろ老境にしろその作品によって推察するより仕方があるまい。だが俳句作品においてもこの句から晩年、老境に入ったと明確に判定することなどできない。それぞれの俳人の初期から歩んできた実作により晩年、老境は自ずから定まってくるもの。

これから標題の蛇笏の老いについて探ってゆきたい。

●「老いざる悲願」の奥にあるもの

飯田蛇笏は終戦後に第七句集・第八句集・第九句集を出版している。第七句集『雪峽』は昭和二十二年から同二十六年まで、六十二歳から六十六歳までの五百三十九句の俳句を収録しているので見てゆきたい。

うたよみて老いざる悲願霜の天 昭和26年

蛇笏六十六歳の折の作で、句集の最終ページに収められている。蛇笏にとって俳句は文学であり創造のしからしめるいのちの表出であることを、評論に俳句作品に発表してきた。この句も俳句を文学として位置付けている

からこそ、感性・詩質の老いざる作品を成し遂げようと考えていることは明白。「老いざる悲願」という表現の奥には、しのび寄る肉体の老いを自覚したからである。『雪峽』最終のページに「老いざる悲願」の作を据え、句集開巻最初のページに、次の作がおかれていることも象徴的であるように思える。

春の霜身が奪る詩を念へども 昭和22年

この句が開巻一ページ目にあることは、いかに俳句に全身全霊を打ちこんで接しているかを理解することができる。前句の「老いざる悲願」のときは、冬の真つ直中で霜が辺り全体に白々と凍った寒さのきびしい晴天の空の色が感じられる。「身が奪る」では春の霜であるから日が差すとすぐに溶ける暖かさがある。そこには、六十二歳から六十六歳、四年間の歲月による肉体の衰えがあると思うのは無理な推測であろうか。その衰えを具体的に表わした次の作がある。

句をえらみてはちかむ死か銀懐炉 昭和24年

句集『雪峽』の丁度中間にある作で、前書に「寒夜句三昧稿終了」とあるから、「雲母」各地の俳句会が、寒中の二夜、句会を開催し、一夜に一人五句、二夜で十句を蛇笏選により、優秀句会賞、個人賞が決定される寒夜句三昧なる独特な雲母錬成俳句会の行事であった。

この選句の終った感慨を俳句にしたもので懐炉を身に

つけての選であり、年ごとに疲れがたまり死に近づいてゆくような予感に老いを思うが、銀懐炉に華やきがある。

こうした諸作を句集『雪峽』では比較的多く見るので蛇笏の晩年を『雪峽』からとしたい。勿論、肉体の衰えを自覚しはじめての句集であるが、それを補う気力の充実を俳句から受け取ることができる。それに、三人の子息の二十代の戦死、病死の逆縁の慟哭を越えての俳句作りは、充実した気力をもった詩精神がなければ乗り切ることができなかつたであろう。

●老境で確立した創作の目標

第八句集『家郷の霧』は昭和二十七年から同三十年の六十七歳から七十歳までの七百二句が収録されている。私は『飯田蛇笏集成』全七巻（角川書店）の第三巻の解説を担当した際、『家郷の霧』について、次の八句を挙げて書いている。

時のかなた昇天すもの日はじめ 昭和27年
風ざわたる地はうす眼して冬に入る 〃
おく霜を照る日しづかに忘れけり 昭和28年
春めきてものの果てなる空の色 〃
炎天の山に対へば山幽らし 昭和29年
雪山に照る日はなれて往きにけり 〃
寝しづみて老が火を吹く寒の闇 昭和30年
歳月をたのしまざりき冬の山 〃

大特集
老い、
そして人生を詠む

こうした諸作を読むとき、作者蛇笏のしずかな、ときに激しい作句に寄せる姿勢が自然の風光のなかに心象を加味して表現され、象徴力のある新しい俳句の確立へと進んでいる。しかも、それが晩年老境の俳句姿勢であることは、これまでの俳句の世界を見渡して稀有のことである。それは、誰もが晩年にたどりつく枯淡の味わいの俳句ではなく、むしろ、新しい俳句創造の詩精神を求めてやまない熾烈な文学姿勢である。そうでなければ、前掲句のような深沈としたなかに潤いのある心情を俳句のなかで表現することはできない。肉体的に老いの意識を感じていたとしても、俳句作品では老いの意識を超えた俳句文学への飽くことのない創作精神が己を支配していたのではあるまいか。晩年にして新しい句境への挑戦は俳句は文学だ、という意識があつて成り立つものである。

以上が『飯田蛇笏集』第三巻の解説の一部分であるが、今回のテーマ「蛇笏俳句に見る老い」に丁度当てはまるので引用することにした。蛇笏の老いについて考えるとき第八句集『家郷の霧』は重要な作品集である。

老境とは誰もが得られる境地ではあるまい。初期から目差してきた精神を持ち続けて進んだ人のみが、晩年を迎えて入ることのできる門ではあるまいか。蛇笏俳句でいうならば、二十代初期の評論で書いた俳句を文学として考える、「靈的に表現されんとする俳句」方向であり

単弁の山椿を愛し、晩年に及んでは、むしろ、緋色大輪の濃艶な八重椿を好んだようだ。みずから庭前に植えたその一樹は、いま、鮮やかに咲き盛っている」

この椿の花は最も地に近いところに花をつけ、あたかも老境の味わいを見せているが、風にも落ちずに微動だにしない気配を見せているのである。丹念に描写した椿の花であるが、読後の「花おちず」の詠嘆に象徴的な広がりを感じる。老いの気持ちを払拭するような居据った気が読後にのこるのは、常に心中に「老いざる悲願」の文学精神を堅持し続けているからである。

薔薇園 一夫多妻の場をおもふ 昭和31年
地に近く咲いた椿の花を見つめての作と同じ年の句であるが、こちらは老艶という言葉がすっと抵抗感なく入ってくる。色彩も多様であろうし、花の大小から形までそれぞれ異なって咲いているバラ園を歩いて、感じたのは一夫多妻の場であった。そこに老いを拒絶した精神の若やぎが感じられる作である。しかし、この年からしばしば脳貧血をおこして体調を崩し、作句も身辺の自然に向った老境の発露を垣間見るが、俳句創作の精神は衰えを見せることがない。

朝日より夕日親しく秋の蟬 昭和34年
鈴蘭の香強く牀に置きがたし 昭和36年
山中の螢を呼びて知己となす 〃

「超主観的俳句」ということになり、その目標が「家郷の霧」の老境のなかで確立されたと考えたい。

●死の床で得た「一天自尊の秋」

第九句集『椿花集』は昭和三十一年から昭和三十七年の死に至る、七十一歳から七十七歳までの四百六十二句が収録されており、蛇笏没後三年半を経て飯田龍太編により、昭和四十一年五月角川書店から出版された。蛇笏最晩年の句集で開巻第一句目に次の作を収める。

地に近く咲きて椿の花おちず 昭和31年
写生俳句でありながら写生を超えた感銘を受けることにより、蛇笏最晩年の代表句のなかの一句として挙げる人が多い。『椿花集』の題名にびたりで冒頭にあるのも注目の要因であろうが、内容に蛇笏俳句の意志が感じられるからである。地に近く咲いた椿の花であつても、まだ落ちることなく、そこに蛇笏俳句最晩年の精神の在り所が感じられる。

飯田龍太の編集によって出版されているそのことを考えたとしても、「椿の花おちず」を句集冒頭においたことは蛇笏も同じ考えであつたに違いなく、莞爾たる微笑をもらしたであろう。『椿花集』のあとがきの中で龍太が、次のようなことを書いている箇所がある。

「椿は、すでに青壮年期から、著者の心惹く花のひとつであつたようであるが、中年までは、主として簡素な

いち早く日暮るる蟬の鳴きにけり 昭和37年
ことに、死を前にした二年間の作から老境の孤愁といったものがひしひしと感じられ、どの作からも作者の胸中にある愛いが表現されている。六十年になんんとする俳句人生の終着点に濁りは微塵もみられず、『椿花集』最後にある次の作によって、蛇笏俳句の老境の輝きに眩しさを増す、と同時に老いざる悲願が達成された。

誰彼もあらず一天自尊の秋 昭和37年

大正七年五月号の「ホトトギス」に発表した、「靈的に表現されんとする俳句」から四十五年余の歳月を経て死の病床で得た「一天自尊の秋」とは、その目差してきた俳句文学の答えではなかったろうか。角川源義はこの句について、蛇笏亡後に集う誰彼に喝を与える句で、それは自らを尊しとし、自らを恃んで「一人この道を歩め」ということである、と。大岡信は「我」は、つきつめた意味で言つて真に尊いものである、なぜかといえば「非我」を識ることができるものは「我」だけだからである、と。飯田龍太はたまたまこの世にえにしありしともがらよ、ひとの生死のはかなさよりもなによりも、おのがじし尊ぶべきものは何であつたか、それをこそ互いに求めようではないか、と。『椿花集』開巻一句目が「椿の花おちず」で、最後が「一天自尊の秋」であることに、「老い、そして人生を詠む」答えが秘められている。